

受 講 案 内 詳 細

グループスーパービジョンB

講師 石井 三智子 先生（日本社会事業大学非常勤講師）

【講師略歴】1956年生まれ。広島県出身。中・高の教員(社会科)を経て、都内医療機関の医療ソーシャルワーカー、企業・在宅医療分野のクリニックのソーシャルワーカーを歴任。南山大学(文化人類学)、上智大学卒業。日本女子大学修士課程修了。武蔵野大学(旧武蔵野女子大学)の専任教員を経て、現在にいたる。「平和教育」の実践を出発点に、被爆者の人権と証言への関心は、被爆2世としての私の原点でもある。この20年近くのインフォーマルなまたフォーマルな形の現役MSWへのサポートは、ライフワークの一つである。

開催日	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
			28日	26日	23日	27日	18日	22日	20日	17日	28日	28日
開催時間	19時00分～21時00分 第4木曜日(ただし、10月・12月・1月は第3木曜日)開催											
会 場	6月・7月 東京芸術劇場(JR池袋駅西口 徒歩2分) 8月以降 家庭クラブ会館(JR新宿駅南口 徒歩8分) ※6・7月と8月以降で会場が変わります。ご注意ください。											
対 象 者	経験年数1年以上5年未満の方 注: 認定社会福祉士のポイントを申請される方は、 <u>欠席・遅刻・早退</u> がありますと、 証明書は発行出来ない場合があります。											

～石井 三智子 先生より～

あるスポーツ競技で最高を極めようとしているアスリートのことばである。「基本的な正しい技術の習得と、練習による積み重ねこそ最も大切である。そのことなくしては、芸術性をも表現するような高みをめざすことはできない。」と彼は、あるインタビューで語る。領域を超えて、ソーシャルワークの分野においても通底するものがあるのではないだろうか。ここ3年近くは、臨床2～3年前後の経験を持つ20歳代から30歳代のメンバーと多くグループで関わってきた。事例や発言、成果原稿から彼らの悩みや葛藤が透けて見えてくる。集約してみると、①自分のやっていることは、患者の利益を最優先し、その気持ちや心に添えているのかどうか②当事者の意思決定を真に支え、代弁者たりえているのかどうか③全体の事例のプロセスから、当初のアセスメントの妥当性、社会資源の選択は妥当であったのかどうかの三つに整理してみたいと思う。職業的な倫理・めざす目標と現実との乖離は当然であり、その葛藤を通じてよりよい支援を再検討していく。患者の権利や意思決定にまつわる悩み、不安全感は、ことに終末期の事例においてより顕在化している。面接における相互交流と本音を引き出す質問力は、事例のプロセスにおけるそれぞれの局面で試され、展開に影響を与えている。今年度は上記にあげたような支援者の悩みや葛藤、不安全感、傷つきに焦点をあて、向きあってみたいと思う。うまくいかないと思ったこと、失敗したと思ったこと、心身の傷つきを経験したこと、その先に何が見えてくるのだろうか。支援者のこうした経験は、患者、家族の悲しみや苦しみ、傷つきと相似形をなしているのかもしれない。提出される事例を通じて、複数の眼差しで検討をすすめていく中で、見えてくるであろうものは、自らと仲間へのエンパワメントであり、支援したい人々へのエンパワメントであることを期待したい。

- 参考文献
- ①アーサー・W・フランク著 鈴木智之訳「傷ついた物語の語り手」 ゆみる出版 2002
 - ②平田オリザ著「わかりあえないことから」 講談社現代新書 講談社 2012
 - ③鷺田清一著「語りきれないこと ～危機と痛みの哲学～」 角川学芸出版 2012
 - ④齋藤環著+訳「オープンダイアログとは何か」 医学書院 2015

～昨年度の受講者の声より～

◆普段業務を行なう中で、自分自身の「出来なかった事」に目が向くことが多いので、石井先生や受講生の方々が優しく新たな視点で事例を捉え直して下さい、大変勉強になりました。事例発表にあたり、資料を作成する過程そのものが面接再考の一助となっていたように感じています。

◆グループのメンバーは志の高い人ばかりで毎回刺激を受けています。皆、悩んだり苦しい思いをしながらやっているんだ、ということに勇気づけられます。それぞれ所属する病院の機能や風土は違いますが、どの事例でも毎回持ち帰れるようなことを学びました。